校内研究通信

守破離

NO.１３

「問い」が立ち現れる瞬間とは：中動態と共同エージェンシーの視点から

本日の国語科の研究授業の終末、授業者から「全員にとって学びたくなる問いの創出の在り方とは」「自分事として個々が問いを持つにはどうしていくといいか」という問題提起がなされました。これは、私たちが現在取り組んでいる研究の核心に迫る、非常に重要な視点だと感じました。今回は、この問いに対する木村の所感として、「学びの中動態」と「共同エージェンシー」という切り口から考えてみたいと思います。

本日の授業では、様子を想像する切り口として「信頼・愛情・大切」といった視点が共有されていました。これらは、子供たちが物語の世界を自分自身の経験や主観でシミュレーションし、捉え直すための「認知スキーマ」のフィルターの役割だったように思います。このフィルターを通して物語に触れ直した時、子供の中に「心がグラリ」という「わきおこり」が生じる。これこそが、中動態的な学びの起点であり、問いが「自分事」として立ち現れる瞬間だと思います。

次に、「全員にとって学びたくなる問い」についてです。研究計画書の「コラム 1」では、「心豊かで実行力のある子供」と「エージェンシー」の重なりと差異について述べています。エージェンシーは「目標を設定し、責任を持って行動する能力」ですが、私たちの目指す「心豊かで実行力のある」姿は、そこに他者への共感や多様性の尊重といった「心の豊かさ」を含んでいます。

これをさらに集団の学びへと広げたのが、「共同エージェンシー（Co-agency)」の考え方です。「全員にとって学びたくなる問い」とは、最初から万人に共通するパッケージとして存在するものではありません。一人の子供の切実な問いや、そこから生じる「ゆらぎ（認知的葛藤)」が、学級全体に伝播し、他者の思考を揺さぶっていく。この「ゆらぎ」の連鎖によって、個々のエージェンシーが点から面へと広がり、学級全体が共通の熱量を持って動き出す「場」が形成されます。この「場」の力こそが、本研究の枠組みで捉えたときの共同エージェンシーであると考えています。本日の公開学級において、子供たちはこれまでの積み重ねを基に、分析的に言葉を紡いでいました。これこそが学級集団として今日まで形成してきた場の力なのでしょう。

本日をもって第三シーズンの授業研究会は一区切りを迎えますが、これからも「そこでしかできない授業」の価値を共に探究していければ幸いです。

（木村　仁）